



C型肝炎ウイルス（HCV）について

C型肝炎ウイルスは放置すると慢性肝炎を起こし、肝硬変や肝がんへと進展する場合があります。肝臓は慢性肝炎や肝硬変になっても自覚症状が出ないことが多いので、ウイルスに感染していることが分かったら、早期に治療を受ける必要があります。

「C型肝炎の疑い」とは、どういう意味ですか？

A 通常の健康診断では、C型肝炎の検査にHCV抗体が使われます。HCVとは肝炎ウイルスのことで、それに対する抗体が採血した血液の中に存在するかどうかを調べます。この検査で陽性になると、C型肝炎ウイルスに感染している可能性があると考えられます。HCV抗体が陽性になるのは、①今もC型肝炎ウイルスが血液の中にいる、②以前C型肝炎に感染したが今は血液の中にウイルスはない、③C型肝炎とは関係ないがたまたま検査で弱い陽性になった（擬陽性）、の3通りです。

「C型肝炎の疑い」と言われた場合、どうすればいいですか？

A 必ず医療機関を訪れて、精密検査を受けて下さい。念のため、もう一度抗体の検査や血液の中のウイルス検査を行います。ウイルス検査としては、HCV-RNAというものを測りますが、これはC型肝炎ウイルスの中のRNAという遺伝子を調べるもので、この検査が陽性だと現在血液の中にウイルスがいるということになります。この検査が陰性だとウイルスはいないので、前述の②もしくは③ということになります。最近はHCV-RNA以外にも、HCV抗原（コア蛋白質）を測ったりもしています。ウイルス検査が陰性であれば、ひとまず安心できます。

ウイルス検査が陽性であった場合、どうすればいいですか？

A まず、肝機能検査を行います。慢性肝炎の時には、AST（GOT）、ALT（GPT）という検査で異常になることが多く、基準値範囲であれば落ち着いていると思われま。AST/ALTが高い時には、放置すると肝硬変に進展したり、肝がんがでやすくなるので何らかの治療が必要です。従って注射や飲み薬を使い、なるべく基準値の範囲にコントロールすることが大切です。他にもたくさん検査がありますが、特に血小板という検査は肝臓がどれくらい硬くなっているかの目安になるので、基準値よりも低下していれば精密検査の必要があります。

C型肝炎ウイルスを、身体の中から追い出すことはできないのですか？

A インターフェロンという注射薬を使えば、追い出すことができます。日本では平成4年から使えるようになりましたが、今までに大変多くの患者さんがインターフェロンによって助かっています。かつては平均30%ほどしか治りませんでした。最近では平均70%は治るようになってきました。また、ウイルスの種類や量を調べれば、前もってどれくらいの確率で治るかが分かるようになってきました。ただし、副作用も強いので、この治療法を行うかどうかは主治医とよく相談してから決めて下さい。

次回詳しく説明させていただきます。

今月のドクター



富田 栄一 氏
（とみた えいいち）
岐阜市民病院 院長（消化器内科）

昭和48年京都大学卒業。岐阜大学第一内科助教授を経て、平成元年より岐阜市民病院消化器内科部長。平成17年より同院長。専門は、肝炎・肝がんの診断と治療。消化器病学会専門医、肝臓学会専門医。